

緊急解説

国家が AIを止めた日

Anthropic Claude Fable5の停止

エージェント型AI主権のための
ネットワーク型エコシステムの必要性

LIVE

2026年6月14日(日)21:00～

中谷 一馬

政治アナリスト



国家が、最先端 AIを止めた。 「使えること」は、当たり前ではなかった。

Anthropic「Fable 5 / Mythos 5」—— 6月9日に公開、6月12日に米政府の輸出管理指令、わずか 3日で全ユーザー停止。
(他のClaudeモデルは影響なし／復旧は不透明)

DeepSeekショックも Mythosのサイバー危機も、
2023年にはわかってたこと。

AIは「便利なサービス」から「戦略物資」へ

これまで

便利なクラウドサービス

いつでも、好きなだけ使える前提。

- APIでいつでも接続できる
- グローバルに提供される
- 価格も提供も安定という前提



これから

国家が管理する戦略物資

電気・石油・半導体と同じ戦略の対象。

- 安全保障を理由に供給が止まり得る
- 同盟国でも、例外ではない
- 民間サービスでも制限され得る

※同盟国であっても、安全保障が優先されれば AIは止まり得る——その現実認識です。



「止まる」リスクは、数多ある

- 政府指令による突然の停止（輸出管理・安全保障）
- 規約変更による利用制限
- API価格の急騰
- モデル変更による業務品質の劣化
- データ・ログ・実務知の囲い込み
- 地政学リスクによる利用制限

これは、AI時代の新しいサプライチェーンリスクである。



「単一依存」から「ポートフォリオ戦略」へ

- **米国AI** (OpenAI / Anthropic / Google) — 高性能。ただし米国一極依存のリスク
- **欧州AI** (Mistral など) — 米国からの遮断に備えた代替候補
- **オープンモデル** (Llama系・各種OSS) — 自社運用・オンプレミスの選択肢
- **中国AI** (DeepSeek / Alibaba 等) — 機密不要の用途に限定し、データリスクを慎重に評価
- **日本独自AI** — 安全保障・公共・重要産業向けに育成

問いは「どれが最強か」ではない。「止まらない業務基盤をどう設計するか」。

「モデルを使えること」と「主権を持つこと」は違う

特定モデルへの依存

止まれば、仕事も止まる

国家・規約・価格・輸出管理に左右される。

- API停止・規約変更・値上げ
- 実務知がベンダー側に残る
- 主権はこちらにない

VS

NECO-ASOVI

= Networked ECOSystem for Agentic AI SOVereign, In vitro

モデルではなく、土壌

知識・実務・信頼・収益権が手元に残る。

- 複数モデルを交換可能にする
- 知識はCubeとして外部化
- 信頼と収益権をネットワークで流通

モデルを使えても、主権がなければ止められる。だから私たちは、AIが発生する“土壌”を取りに行く。



「知能の内部化」—— 中央集権型 AI の独占構造

- LLM の発展は人類史の転換点となり、専門知識や経験を要した作業が、適切なプロンプトを入力するだけで瞬時に自動化されるようになった。
- しかし華やかな表層の裏で、ごく一握りの巨大テック企業による基盤技術のブラックボックス化と市場の寡占が進行している。
- 最新鋭モデルの内部構造や学習データは企業秘密として囲い込まれ、人類の共有財産となるべき知識や推論ロジックが単一企業のモデル内部へと閉じ込められる。
- この「知能の内部化」とも呼ぶべき独占構造が、エンドユーザーと社会全体を極めて脆弱な立場へと追いやっている。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

いまのAIは「中身の見えない箱」を、数社が独占している

- ChatGPTのような便利なAIは、ほんの数社の大企業がつくっていて、学習データや仕組みは企業秘密＝「ブラックボックス」になっている。
- 本来みんなの共有財産になるべき知識や考え方が、1社のAIの中に閉じこめられてしまう。これを「知能の内部化」と呼ぶ。
- 大事な決まりや仕事を「中が見えない大きな存在」に丸ごと任せると、利用者も社会もとても弱い立場に追いやられる。



出発点 ② / THE PROBLEM



ロックイン・プラットフォーム支配・実務知の揮発性



ベンダーロックイン

API 経由の従量課金に依存し、
推論コストは指数関数的に増大。
離脱の自由がない。



プラットフォーム支配

審査・手数料(売上の数十%)・
ポリシーが密室で決まり、
開発者は「従うか、去るか」の
二択を迫られる。



実務知の揮発性

育てた業務知識は非構造的な
プロンプトにとどまり、仕様変更や終了
で一瞬にして無効化される。

問題の核心 — 主権の不在

知能・信頼・価値分配という中核機能が、企業のブラックボックスに集中している。ユーザーは知的資産の所有権も、サービスの継続性も、自らの手に持てない。この構造そのものを書き換えることが、本構想の出発点である。

到達点 / THE GOAL

主権の再配置を実現する「三つの移行」

巨大 IT 企業が独占してきた「知識の源泉」「信頼の流通基盤」「価値の分配機構」を、ネットワークの側へ組み替える。次の三つが同時に進行して初めて、主権の再配置は現実のものとなる。



移行 1

信頼の根源

企業ブランドから
暗号学的な検証可能性へ



移行 2

知能の所在

モデル内部から
ユーザー側の外部トポロジーへ



移行 3

主導権

モデル所有者から
ワークフロー育成者へ

核となる価値命題 — 信頼の民主化 (Trust Democratized) :

信頼のよりどころを、企業の善意ではなく暗号学的な検証可能性そのものへ移す。

単体から、群へ。そして「発生する」生態系へ。

Phase 1

単体AI

人間が作る。個別のモデルを設計し、人手で構築・運用するフェーズ。

Phase 2

AI群

連携・拡張。複数のAIが結びつき、互いを補完しながら能力を拡張するフェーズ。

Phase 3

自己増殖する AI生態系

発生する。AIがAIを生み、土壌の上で自律的に増殖・進化していくフェーズ。

AIカンブリア爆発前夜。

AI爆発で生まれる莫大なお金を、人々にダイレクトに流すソリューションを実装する。

Mythos は『作られた』もの。
これからの AIは『発生する』。

『発生器』は『エコシステム』 と呼ばれている。

本当に取られてはいけないのは、AIそのものではない。AIが発生する畑、AIが育つ土壌。

ここでの「エコシステム」は "仕組み" ではなく "生態系"。

作る人がいなくても、勝手にAIが生えてくる空間のことです。

"作りやすくする"話ではありません。"作り手ゼロで、勝手に生まれ出る"——

これがエコシステムです。



「エコシステム」は“仕組み”ではない。 それは“生態系”のことだ。

× よくある誤解

「エコノミーなシステム」—— みんなが、より低コストに、何かを“作りやすくする”仕組み・環境のこと。

※ この意味でも通用するが、語源からは明らかに誤った理解。

○ 本来の意味（生態系）

「作りやすく」「低コスト」「仕組み」の“対極”。そこには作り手も、コントロールも存在しない。ただ“在る”だけで、誰も作らずとも、AIが勝手に“生えてくる”—— そういう空間であり、相互作用そのもの。

腑に落ちていただきたい着地点 —— 「作る人はゼロ。なのにAIは勝手に生まれ出る。生まれた無数のAIが稼ぐ仕組みも、その富がみんなに配られるメカニズムも —— 丸ごと全部、最初から組み込まれている。」

2026年は、その発生器が
現実化する分岐点です。

「モデルを作る」のか、「エコシステムを作る」のか。

「モデルを作る」ソブリン AI

単体のAIモデルを国産化する

モデル単位で技術的自立を目指すアプローチ。

- 特定のAIモデルを開発
- 技術的な自立を目指す
- モデル単位での管理

VS

「エコシステムを作る」ソブリン AI

AIが発生する土壌を握る

発生環境そのものの主導権を握るアプローチ。

- AI生態系全体を構築
- 発生環境の主導権を握る
- エコシステムレベルの管理



この夢物語は、もう 「構想」 ではない。
実現可能な 「設計」 に、達している。

夢物語



構想



設計 — 2025年末 到達

これからお話しする「7つの設計原理」は、正直に申し上げて、この場で一度にご理解いただくには難しすぎます。
ですので今日は、ひとつだけ感じ取っていただければ十分です。

—— 2025年末の時点で、本質的に実現可能な 「設計」 の段階にまで到達している。
その **手応え** だけ、今日は持ち帰ってください。

中身は回を分けて、最終的にはすべてご説明します。今日は、その入口まで。

7つの設計原理

1



LLM の相対化と知能の外部化 (Large Language Models)

LLM を言語処理エネルギーと再定義し、
知能を型付き階層 DAG として外部化

2



OS on OS (Operating System on Operating System)

ホスト OS 上に自律仮想 OS を展開。
ブラウザの牢獄を突破し PC を居住空間に

3



GMR と差分限定推論 (Graph-Memorized Reasoning)

確定済みの判断経路をメモ化し差分
のみ再計算。コストが単調減少

4



知能の暗号化カプセル Cube

知能を固化し暗号化。所有権を保ったま
ま流通・自己増殖する知能カプセル

5



P2P と堅牢な基盤 (Peer to Peer)

中央サーバ不在のメッシュ。時刻の主権
と Proof of Malfeasance で自律防衛

6



信頼の鎖と eKYC (electronic Know Your Customer)

実名バインドと市民権の階層化。
責任ある公共圏を分散的に構築

7



AI 収益権と二次投票

AI が生む富を大衆へ還元し、
熱意を計量する民主的意思決定

各原理は相互に補完し、
一つのインフラへ収束する

1

第一の設計原理

LLM (Large Language Models) の相対化と知能の外部化

LLM を交換可能な「言語処理エネルギー」へ押し下げ、業務知識をモデルの外側に構造として蓄積する。

型付き階層 DAG

Input/Output Schema

再帰的合成

モデル非依存



2

第二の設計原理

OS on OS (Operating System on Operating System) とブラウザの牢獄からの解放



ホスト OS の上に自律的な仮想 OS を展開し、ブラウザのサンドボックスを突破。
PC を「自律エージェントの居住空間」に変える。

マルチプロセス仮想レイヤー

トロイの木馬戦略

オムニプレゼンス

自発性 AI

3

第三の設計原理

GMR (Graph-Memorized Reasoning) と差分限定推論

確定済みの判断経路を「メモ化」し、差分 (Δ グラフ) のみを再計算する。生物の神経回路網に倣い、知識基盤を「生きた」状態に保つ。

決定済み部分グラフ

Δ グラフ / 差分限定推論

コストの単調減少

忘却と再活性化



4

第四の設計原理

Cube —— 知能の暗号化カプセル

培われた知能を環境非依存の「固形物」へコンパイルし、所有権を暗号的に保護したまま流通・自己増殖させる「運べる知能の最小単位」。

固形化

暗号防壁

期限付き鍵

フュージョン

系譜ログ

三層独立



5

第五の設計原理

P2P (Peer to Peer) トポロジーと 堅牢なアーキテクチャ



認証・時刻・仲介を中央サーバに委ねない。存在の継続権を他者に預けない、自律防衛する分散基盤を物理層から築く。

P2P メッシュ / DHT

Fate-Sharing

時刻の主権 (UTC)

Proof of Malfeasance

6

第六の設計原理

信頼の鎖と現実世界のアイデンティティ



暗号的に整合したノードの世界に、現実世界の責任主体を接続する。匿名性の自由と、実名の責任を両立させる。

シングルトン・ロック

eKYC / 市民権 L1-L3

Proof of Personhood

影分身としての Cube

7

第七の設計原理

AI 収益権の還元と二次投票



AI が生む富を少数の資本家から大衆へ分散還元し、意思決定には「熱意の強度」を計量する二次投票を導入する。

AI 収益権の大衆分散

系譜ログ連動の還元

二次投票 (QV)

Trust Market

AI収益権の大衆分散装置 — 桁の違うインパクト。

最大

25.6兆ドル

(約4,000兆円)

AIが生む潜在的経済効果

約

111兆ドル

(約1京7,500兆円)

世界全体のGDP合計

最大

45.3兆円

2035年のデジタル赤字

ムハマド・ユヌスがグラミン銀行を創設し、マイクロクレジットで
最貧困層の女性に自立の資金を届けたように、
私はAI主権を人々に届け、
お金やチャンスが行き届いていない人に決定権を付与し、
世界平和を本気で取りに行く。

AI爆発で生まれる莫大なお金を、
人々にダイレクトに流し込むための
AI収益権の大衆分散装置
= 整流器を、本気でつくりたい。

土壌を握るとは、"作る環境を配る"ことではなく、
"勝手に生まれ、勝手に稼ぎ、その富が還る"生態系ごと押さえることです。

誰かの『得意なこと』が、
誰かの『困っていること』を助ける。
猫の手でも借りたいあなたへ、AIの手を届ける。
だから、NECO-ASOVI

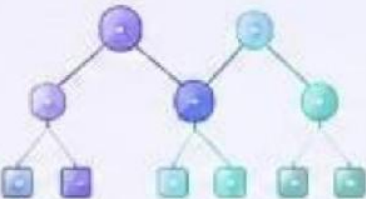
Networked ECOsystem for Agentic AI SOVereign, In vitro
= エージェント型AI主権のためのネットワーク型エコシステム。

型付き階層DAGと熱意モデルによる知的OSの創出

知識・意図・熱意が安全に流通し、価値が循環する知的インフラを構築する



型付き階層DAGとは



知識や業務を「型」で定義し、階層的なDAG構造で関係性を表現。検証可能で再利用性の高い、知的資産の基盤となる。

熱意モデルとは



人の熱意や想いを定量化し、貢献に応じて正しく評価・還元。持続的な知的エコシステムの原動力となる。

目指す未来

誰もが知識と熱意でつながり、共に創り、価値を分かち合う知的OSの社会を実現する。

社会実装を目指す次世代ソリューション構想

仙人のような天才エンジニアと共に、音声・実行・知能・アプリ・信頼基盤を統する

イメージ的には： Aqua Voice × OpenClaw × Claude × App Store × Blockchain

Aqua Voice



自然な音声インターフェース
で誰もが直感的に利用可能

OpenClaw



自律的にツール・デバイスを
操作し、現実世界で実行

Claude



高度な対話・推論・計画で
最適な判断と支援を実現

App Store



多様なアプリ・拡張が集まる
エコシステムで価値を拡張

Blockchain



信頼できる分散台帳で
安全・透明・改ざん耐性を提供

統合プラットフォーム

音声 × 実行 × 知能 × アプリ × 信頼基盤
を一体化

社会実装へ

人々の暮らし・働き方・
社会の仕組みをアップデート

奥の静かな場所で、
テクノロジーの本質を見つめ、
未来を形にする仙人のようなエンジニア。

リリース後、ぜひ一度触っていただきたいソリューションです。

未来の “スタンダード” を創ろう



Think Different

異端であれ
